

第96回 歴史リレー講座「万葉集と壬申の乱」 井上 さやか氏 (R4.9.18)

今年は672年の壬申の乱から1350年という節目の年。古代史最大の内乱にも関わらず、『万葉集』で扱われる壬申の乱関連の歌は意外と少ないものです。代表的なものが乱から80年後、天平勝宝4年(752)の「大君は神にし坐せば赤駒の匍匐まふ田居はらぼを都となしつ」(巻19、大將軍贈右大臣大伴たい卿まへつぎみ)と「大君は神にし坐せば水鳥のすみぬまだく水沼みぬまを都となしつ」(巻19、作者不詳)。乱が起きた天武天皇時代の歌は巻1と巻2に集中しており、巻17から巻20までは実質的に大伴家持の歌日記と言われます。一対で扱われるこれらの歌が、なぜ乱後80年も経ってから披露されたのか。家持がどういった経緯で書き残したのかは今も謎です。

また、これらは「壬申の年の乱の平定せしのち以後の歌二首」という曖昧な表記のため、詠まれたのが乱の直後なのか、少し時間をおいてからなのか不明です。しかも、戦で手柄を立てたはずの大將軍大伴卿の名が『日本書紀』に初めて登場するのは乱が鎮まってからです。このように、歌集『万葉集』と歴史書『日本書紀』では内容的にタイムラグが見られる場合が少なくありません。

これら2首は天武天皇を神と見做しています。意味は、「天皇は馬の腹が沈むくらいの田んぼでも都に整地してしまわれた。人間業では到底できないことだ。」「天皇は水鳥が棲むような沼地をも整地して都にされた。神ならでは偉業だ」。どちらも、壬申の乱を鎮めた天皇への最大限の賞讃が見て取れる、政治的意味合いの濃い作品です。だれかが記憶し、80年かけて人から人へ伝承され、家持が書き残したこれらの歌を現代の私たちが目にしていることは実に不思議な気持ちにさせられます。

ここで私が力を込めてお伝えしたいのは、現実をあるがままに詠んでしまうと、歌本来の意味が変わってしまうこともあるということです。裏を返せば、古代に詠まれた歌だからといって現実しか捉えていないというわけではありません。むしろ、文学というのは想像力を羽ばたかせることに意味があります。弓削皇子が亡くなったときに置始おきそめ東人が詠んだ「大君は神にし坐せば天雲の五百重いほへが下に隠り給ひぬ」(巻2)は、「神でいらっしゃる天皇が天雲の重なり合うような天にお隠れになった」という嘆きの歌です。弓削皇子を天皇と捉えているのは父が天武天皇であり、母が天智天皇の娘だったからでしょう。こういった例は柿本人麻呂が詠んだ忍壁皇子や長皇子の歌にも見られます。獺に出かけた長皇子を歌った「ひさかたの天ゆく月を網に刺しわおほきみご大王は蓋きぬがさにせり」(巻3)は、実際の蓋(絹傘)を意味しているのではなく、天空をゆく月そのものを蓋に見立てることで、人間業では成し得ない行為を表現しています。

十市皇女とおちのひめみこは、父である天武天皇と夫である大友皇子が壬申の乱で争った悲劇の女性として知られます。皇女が伊勢神宮に派遣されたときに、お付きの女性吹黄刀ふきのとじ自が詠んだ「河の上のゆつ岩群に草生さず常にもがもとこをとめな常処女にて」(巻1)からは、「苔の生えない石のように、あなたには常に少女のようにあってほしい、そして長生きしてほしい」という、傷心の皇女への細やかな心遣いが伝わってきます。

その十市皇女の異母弟、高市皇子たけちのみこは母親の出自のために天皇位に就くことはなく、持統天皇のもとで太政大臣として腕を揮った人物。直接的な描写ではありませんが、『万葉集』には壬申の乱における高市皇子の活躍を詠んだ長歌が存在します。柿本人麻呂が文献史料を意識しながら作ったもので、この点が壬申の乱における天皇讃美を連ねる『日本書紀』との大きな違いです。長歌の前半は太刀と弓で軍勢を率いる高市皇子の勇猛果敢な姿、後半はその送葬の様子が描かれています。

平安時代の文学『源氏物語』に戦乱の描写が見られないのと同様に、『万葉集』において天然痘の流行や戦乱に関する直接的な記述はまれです。『万葉集』はあくまでも歌集であって、歴史書ではありません。歌文化の世界では病や死、戦乱をストレートに扱わないのが定石です。このことが『日本書紀』などとはまた違った色合いを見せている要因だと考えられます。